

# 難聴児と音楽について

川島涼花

(植草学園大学 発達教育学部 発達支援教育学科 4年)

## 1. 問題の所在

難聴についてのテレビで、難聴の方が音楽を楽しんでいることを知った。筆者は、通っていた幼稚園が音楽に力を入れていたため、幼少期から音楽に触れる機会がたくさんあった。しかし、難聴の方は何がきっかけで音楽を楽しむようになったのか、どのように音楽を楽しむのか、疑問をもった。

難聴について調べてみると、聞こえを補う手段は補聴器だけではなく、人工内耳はより音が聞こえやすく、音楽も楽しめることが分かった。人工内耳という単語を初めて耳にし、難聴児に対して音楽療法が行われていることも知った。

また、難聴の方に「女の子の声はみんな同じに聞こえる」と言われたことで聞こえに関心を持った。

難聴児に保育者としてどのような支援ができるのか、どのようにすれば園での音楽活動が難聴児にとって楽しいものになるのか知りたいと思い、本研究に至った。

## 2. 目的と方法

難聴の方2名にインタビュー調査を行い、文献研究を含め、以下の3点について考察する。

- ①難聴児に音楽を好きになってもらうにはどうすればよいか
- ②どのような音楽活動なら難聴児でも楽しめるか
- ③保育者のできる支援は何か

調査期間：2019年8月～9月

調査方法：1人40分程度のインタビュー

ICレコーダーでの録音及び筆記による記録

## 3. 結果

作成した質問シートの項目に添って結果を示す。

### (1) 現在と幼少期の聴こえの程度について

2名(Aさん、Bさん)とも、現在と比べ幼少期のほうが聴力が高い。また、高い音より低い音のほうが聞き取りやすいことが共通している。

### (2) 就学前の通所施設について (通所を始めた年齢)

Aさん：幼稚園(年中)、療育センター(2歳)

療育センターは週に2.3回程度

Bさん：保育園(不明)、聾学校幼稚部(3歳)  
保育園と幼稚部を半日ずつ

### (3) 就学前の施設や小学校での音楽活動について

#### ①音楽活動について

Aさん：歌、ダンス、バルーンなど

Bさん：リトミック、ピアノに合わせて歌を歌う、タンバリンや太鼓など

#### ②上記の体験の印象

2名とも始めは楽しいイメージはなく、できないことへの不安が多いように感じた。しかし、保育者の支援や、保護者の協力を受け、現在はよい体験だったと感じている。

また、ダンス自体は体を動かすので楽しかったが、音楽には興味はなかったとも話している。

#### ③大変だった音楽活動

2名とも、他児と合わせて一緒に歌うこと、リコーダーを挙げている。また、運動会やお遊戯会などにおけるダンスも周りを見ながらのため、楽しい経験にはなっていない。

### (4) 保育者や教員にしてほしかったこと

- ・リズムは言葉に変える
- ・手拍子、ジェスチャー、身振り等の視覚的な支援
- ・音楽活動の際は、保育者に隣についてもraitたい
- ・理解できなくてもドレミ等を言葉で教えてほしい
- ・困っていることに気づいてほしい
- ・マイクは聞き取りにくい

### (5) 現在音楽を楽しんでいるか

2名とも、現在は音楽を楽しんでいると回答した。音楽を知るきっかけとして、好きなアーティストがいることも大きな要因だが、友人から紹介してもらうことやYouTubeが挙げられた。

特にYouTubeは、字幕機能によって歌詞を見ることができると、2名とも活用している。

音楽に興味を持ったきっかけとして、Bさんはある曲の歌詞を見て感銘を受けその曲に関心を持ったと話していた。幼児期は言葉をまだ吸収している途中であるため、歌詞に共感して音楽に興味を持つことは少ないだろう。しかし、YouTubeは映像もあるため、字幕

機能と共に活用すれば難聴児も音楽に興味を持つきっかけになるだろう。

#### (6) 難聴児が楽しめる音楽活動について、保育者が留意すべき点について

##### ① 難聴児が楽しめる音楽活動について

- ・童謡の歌詞に合わせた手話
- ・たくさんの楽器を演奏する経験
- ・難聴の有無にかかわらず、みんなが楽しめる活動が理想である

##### ② 保育者が留意すべき点について

- ・口を大きく動かし、はっきりと話す
- ・表情は豊かにする
- ・映像を含めた視覚的支援を行う
- ・音楽が嫌いにならないような配慮

## 4. 考察

文献研究とインタビュー結果から、本研究の目的である3点に添って考察する。

#### (1) 難聴児に音楽を好きになってもらうにはどうすればよいか

・幼少期の音楽体験で、音楽への印象が大きく変わると考える。Aさんはバレエ、Bさんは幼稚園での楽器の体験と、幼少期から音楽に触れている。このような体験があったから、現在音楽を楽しめているのではないか。保育者は、難聴児だからと音楽から遠ざけるのではなく、様々な音楽体験ができるような保育を展開する必要がある。

・しかし、いきなり歌を取り入れるのではなく、まず音に触れられる環境を整えることが大切である。

#### (2) 難聴児でも楽しめる音楽活動について

・打楽器は振動が伝わるので、難聴児が音を感じやすい。難聴児が音楽活動をする際に最も使用される楽器でもある。打楽器から楽器に触れる楽しさを知り、様々な楽器に興味をもってほしい。

・難聴児が歌いやすいと感じる歌と、歌いにくいと感じる歌の違いは、リズムにあると考える。難聴児が歌いやすいと感じる歌の条件として、以下の2点が挙げられる。

##### ① 1つの音符に歌詞が1文字ずつのっている

例) 「おんまはみんな」

##### ② 発声、体を動かすことが同時にできる

例) 「おおきなくりのきのしたで」

・歌を歌うだけでなく、簡単な振付等をつけ、リズム遊びのようにする方がわかりやすい。

・外遊びで拾ったどんぐり等をマラカスにする。

・「あぶくたった」で「何の音？」の部分に楽器を使用する。

#### (3) 保育者のできる支援は何か

・本研究を通して最も有効な支援は視覚的な支援であると考えた。聞くことが苦手な難聴児にとって、視覚からの情報が大きな情報源となっている。保育者は、子どもたちが見るだけでわかるような支援を保育に取り入れるべきである。

・保育者自身も情報源の1つであるため、表情豊かに、それぞれの子どもが聞きやすい声の高さで、口をはっきりと動かし、ゆっくりと話すこと等を意識したい。

・本研究を通し、難聴に対する理解が保育現場であまり進んでいなかったことがわかった。保育者は、難聴の基本的な情報をはじめ、難聴児は何が苦手で、どのような支援を必要としているのかを理解する必要がある。自分の身に置き換えて想像してみると、必要な支援が見えてくると考える。

・Aさんは「リコーダーの授業で『ピーとなったら』と言われても「ピー」がどのような音かわからない」と述べていた。このように、オノマトペは音の説明を音でしているため効果が薄いと考えられる。

・話し始める前に肩を叩いたり、他児に協力してもらい、今から話すよ、と伝えることが必要である。

・園に在籍している間に難聴が発見された場合、保護者の意見を尊重しつつ適切な施設へつなげる事ができるのは保育者である。

・歌唱時に、他児と一緒に歌えない、合わせられないことに対する不安が大きいと推察される。そのままだと音楽が嫌いになってしまう可能性も考えられる。不安な気持ちを保育者が感じ取り、様々な支援で対応していく必要がある。

## 5. 今後の課題

#### (1) 保護者支援

難聴児の保護者はどんなことに困り、どんな支援を必要としているのか。保育者としてできる支援は何かを研究していく。

#### (2) 難聴児が歌いやすい歌

本研究では、難聴児は1つの音符に歌詞が1文字のっている歌が歌いやすいのではないかと考察した。さらに、どんな種類の歌が歌いやすいのか研究していく。

#### 主要参考文献

『声めぐり』 齋藤陽道 晶文社 2018年

『異なり記念日』 齋藤陽道 医学書院 2018年